

したがって、Duchenne 型児童の場合の低IQは、精薄児のそれとは質的にどこか異なるものと思われます。

我々は今後、Duchenne 型児童の低IQがどこに起因するかを検討する際、ITPA 言語学習能力診断検査を用いようと考えております。

特に、ITPA を選んだ理由としては、(1) Duchenne 型児童の場合、言語発達が未熟であるといわれており、WISC にみられるように言語性が動作性に劣っていること、(2) 言語発達の未熟はどこに起因しているのか、またそれは、精薄児とどう異なるのかということであります。

村上氏は、ITPA を精薄児に施行し、視覚系が聴覚系より優れていることを指適しており、Duchenne 型患児のWISC 知能検査結果についていえば、聴覚系を中心とする言語性が視覚、運動を中心とする動作性に劣っており、こうしたことを考えるならばITPA においても、村上氏が指摘すると同様の結果になることが予測されます。このような考え方のもとにDuchenne 型患児の言語発達がこのITPA における4回路、3過程、2水準のどこに問題があるのかを、WISC 知能検査との関り合いにおいて検討していきたいと思ひます。

24) 病棟職員と患者の要求比較に関する一考察

国立療養所八雲病院

藤 島 慎 一 桜 田 裕
大 友 政 明

筋ジス病棟では、49年から義務教育修了者を対象に病棟生活に対する意識調査を行ない、その実態を報告してきましたが、今回は単に彼らの要求、考え方がどんなものであるかということをつかむだけでなく、職員が彼らの要求をどのようにとらえ、考えているかを知ることにより更に充実した病棟生活を確立していくことを目的とし本調査を実施しました。

対象は、義務教育修了者53名、病棟職員79名を対象にアンケートを実施、70%の回答を得ましたのでその結果を報告します。

(表1)

病棟生活に必要な理由

必要の有無	患者	職員
必要である	82%	85%
必要ではない	0%	2%
わからない	18%	15%
必要理由	患者	職員
単調な生活に変化が与えられる	33.0%	33%
リハビリ施設が充実している	6.1%	8%
職員と患者が一緒に活動できる	24.2%	25%
普段の生活に支障がでない	6.1%	8%
職員に支障がでない	0%	8%
職員交換により生活が安定する	3.0%	12%
その他	9.1%	8%

(表2)

主体的運営

項目	患者	職員
患者自身の手で	15%	28%
指導員・保母の手で	15%	11%
看護婦の手で	2%	0%
職員と患者さんの手で	48%	51%
指導員と患者さんの手で	5%	8%
その他	15%	2%

表1は、行事の必要性とその理由、

表2は、行事の主体的運営をみたものですが、行事が必要であるが80%、その主な理由として「単調な生活に変化が与えられる」「職員と患者と一緒に活動できる」となっています。行事の主体的運営については「患者自身の手で」が患者の場合15%しかなく、行事の必要理

由のなかで「リーダー性、積極性が養える」「意見交換により創意性、協調性ができる」ということが低くでているのと関連し、行事を自らの手で作り上げていくという自主性、積極性に欠けているといえます。

表3は、町への散歩、買物の必要性和その理由をみたものですが院外からの外出の必要性が非常に高く、理由については表3の通りです。

表4は、一昨年より音楽鑑賞協会主催の例会を鑑賞していますが、これは、その必要性和必要理由をみたものです。職員より患者の方が必要度が高くでている、その理由としては表4の通りです。

これらは日常テレビやレコードで聞く楽しみもありますが実際にその場にいて聞きたいという要望の表われだと思えます。

表5は、作業室の必要性和その理由をみたものですが、現在当院では、手芸、木工・ピータッチなどの作業を病室・ブールーム・風呂場を利用していますが、表5の通りいずれにしても作業室の必要性和高いことがうかがえます。

表6は、サークル活動の必要性和をみたものであり、必要であるというのが患者・職員とも60%台をしめています。

サークル活動をするのであれば、どのようなサークル活動をしたかについては、表7の通りですが、サークル活動の中で無回答が35%もしていることは、サークル活動に対する関心が低く自主的な活動への消極的傾向の表われであるといえます。

以上、病棟生活に関する患者・職員の考え方をみてきましたが、全体的には生活範囲を広げて生がいのある生活をさせようという点で一致していますが、患者自身自分達の生活を自ら作り上げていくという積極的な姿勢が全体的にまだ低いといえます。このことは、行事、サークル活動の面からみてもわかるように生活向上のための積極性・創意性がまだ低く、職員に対する依存的傾向にあるといえます。

今後更に生活範囲を拡大し、生きがいのある生活をさせるため自主的な活動ができるような指導体制の確立をしていきたいと思えます。

(表3)

町への散歩買物の必要性和理由

必要性和の有無	患者	職員
必要である	92%	81%
必要でない	0%	17%
わからない	5%	11%
無回答	3%	5%
理由		
町への散歩を自らの手で作り上げる	51%	61%
買物の必要性和	8%	0%
町の人とのふれあいがいい	0%	36%
町の景色がきれい	19%	8%
気分転換になる	10%	44%
その他	5%	4%
無回答	3%	0%

(表5)

作業室必要性和理由

必要性和の有無	患者	職員
必要である	82%	63%
必要でない	2%	6%
わからない	7%	18%
無回答	7%	11%
理由		
作業室の必要性和	30%	47%
手芸の必要性和	9%	0%
木工の必要性和	15%	13%
生活の場としての必要性和	9%	18%
その他	21%	21%
その他	6%	0%
無回答	3%	0%

(表4)

音楽鑑賞例会の必要性和理由

必要性和の有無	患者	職員
必要である	87%	60%
必要でない	0%	3%
わからない	7%	26%
その他	0%	5%
無回答	5%	5%
必要理由		
生の演奏・歌が聞ける	51%	58%
好きな歌が聞ける	20%	11%
聴くのが楽しい	0%	8%
気分転換になる	0%	8%
気分転換になる	17%	0%
その他	5%	11%
無回答	5%	2%

(表6)

サークル活動の必要性和理由

必要性和の有無	患者	職員
必要である	65%	68%
必要でない	0%	17%
わからない	27%	18%
無回答	7%	11%
趣味を伸ばしたい	23%	24%
仲間と交流したい	30%	24%
交流できる	19%	26%
他人と交流できる	19%	0%
生活の場としての必要性和	7%	17%
その他	0%	0%
無回答	0%	7%

サークル活動

項目	患者	職員
フットボール	12%	16%
無線	7%	17%
絵画	7%	10%
手芸	12%	17%
将棋	0%	17%
囲碁	2%	17%
書道	0%	17%
映画	20%	21%
華道	2%	3%
茶道	0%	0%
その他	0%	5%
無回答	35%	40%

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

筋ジス病棟では、49年から義務教育修了者を対象に病棟生活に対する意識調査を行ない、その実態を報告してきましたが、今回は単に彼らの要求、考え方がどんなものであるかということをつかむだけではなく、職員が彼らの要求をどのようにとらえ、考えているかを知ることによって更に充実した病棟生活を確立していくことを目的とし本調査を実施しました。